の子笠を用ゆ、はじめは價もさまで貴からざりしに、次第に巧を盡してより、駿河細工の如き竹がさ、又は藤笠流行して、價百疋貳百疋にも及とぞ、すげの笠は、價三四匁にて、日をおほふに強く、かぶりて輕し、夫を今の竹笠に、百疋餘を費すは、あまりなること也、

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進○中略　藺笠卅六枚和泉國調

〔今昔物語十一〕天智天皇御子始笠置寺語第三十

今昔、天智天皇ノ御代ニ御子在マシケリ、○中略皇子馬ヨリ下テ泣々伏シ禮ミ、後ニ來テ尋ムニ注シニ見ムガ爲ニ、著給ヘル藺笠ヲ脫テ置テ返ヌ、○下略

〔守貞漫稿二十九笠〕藺笠○圖略

燈心草ヲ以テ製之、從來未見之、嘉永四年ヨリ初テ流布シ、步行ノ武士專ラ用之、蓋供ニハ不用之、私ノ他行ノミ用之、大流布也、京坂不用之、

或人曰、從來南部ヨリ產製之、南部製ハ雨中用之時、濕リテ編目ヲ塞ギ雨ヲ洩サズ、今專用スル物ハ、嘉永六年ヨリ右ノ藺笠種々ノ形ニ造リ、市民モ稀ニ用之、右ノ藺笠ハ、琉球表ニ造ル藺ト同ク太キ物也、又編笠ニ用フルハ、備後早島表ニ用フル細キ丸藺ナリ、

〔運步色葉集〕須ノ菅笠。

〔名物六帖器財五傘笠杖履〕臺笠（スゲカサ）

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕菅笠（すげがさ）　須計加左

按、菅笠、中古制之、與簑笠形同、而以菅葉縫成、但莞笠避暑、簑笠賤民以禦雨耳、菅笠雨日兩用、而貴賤男女、冬夏咸旅行必用之具也、出於賀州金澤者上品、防州柳井次之、攝州深江今里多作之、

〔武家當時裝束抄行粧具〕臺笠　菅笠を用ヒ、略義也、ぬり笠をも袋に入て持する也、是は旅行の具のみなれども笠計は常にも用べし、菅は日をよけるものにて、車に檳榔毛車とて蒲葵といふものにて車をふくもの也、びろうはふつていなるものゆへ、もしびろうなき時は、菅に